

一般社団法人日本有機農産物協会主催 第2回公開セミナー実施

一般社団法人日本有機農産物協会（Japan Organic Products Association）は、2019年11月27日（水）に、「東京オリンピック・パラリンピック食材調達基準からみた有機JAS認証の課題と今後」をテーマに、第2回公開セミナーを実施いたしました。第一部では、一般社団法人フードトラストプロジェクト代表であり協会理事である徳江倫明がテーマについて概要説明を行い、続いて、各分野の専門家4名の講師により講演を行いました。第二部では、講師らと共に認証の課題や有機農業の普及拡大に向けた取組についてパネルディスカッションを行いました。

◇イントロダクション

セミナー冒頭では、協会理事である徳江倫明が、東京オリパラを切り口とし、今後の有機JAS認証のあるべき姿・方向性を紐解くことが今後の有機業界の課題であるとの考えを示しました。当協会のオリパラでの有機食材の供給体制や、事後の広報的な役割についても触れ、消費者の共感を得ることが課題であり、協会としては先々のテーマを拾い、先を見据えた行動を起こすことが大切であると説明しました。



第一部（講演）

セミナーでは、行政と民間の各分野の専門家が一堂に会し、それぞれの立場で認証制度および有機農業界の今後について講演しました。



◇講演1「有機農業の最近の施策動向について

—農林水産省令和2年度概算要求の示すもの—

農林水産省生産局農業環境対策課 課長補佐 嶋田 光雄氏
現在の有機農業を巡る状況について説明する中で、環境保全に対する有機農業の優位性を本年8月に公表したことに触れ、有機農業の生物多様性保全効果、また地球温暖化防止（土壌炭素貯留）に効果が見て取れるとの見解を示した。国としての施策については、農水省の審議会の中で検討を行い、改めて目的から課題までを整理しなおし、“有機農業が農業全体の中で広がっていくことが農業の発展や課題解決に繋がっていく”といった議論が行われ、制度についても生産者と消費者の両者にとって、“わかりにくさ”が議論になったと説明した。最後に、令和2年の概算要求についても触れ、これまで実施してきた人材育成、産地育成に加え、消費者に対し付加価値のある消費を促すバリューチェーン構築を盛り込み、有機農業の面積拡大に向けた取組に支援をしていくとした。

◇講演2「生産者からみたGAP認証と有機JAS認証」

有限会社吉水農園 代表取締役 吉水孝道氏
平成12年より有機JAS認証を取得し有機農産物の生産・販売（現在30ha）

吉水農園では有機JAS認証を取得していたため、GAP認証取得には至らなかったが、食品安全の観点から見ると、GAP認証における生産方法、品質管理、衛生管理、労務管理、マスマバランス等、参考となる項目があり、同社でも経営上の理由から品質管理等等は導入している。しかし、一方で、異なる2種の認証を取得するには農家として負担が多く、課題が3つあるとした。肥料の購入代、労務負担、人材確保・育成だ。これらを解決することでGAP認証の利点が有機JAS認証に加わり有機農産物の品質向上のメリットは大きくなる。GAPに準じた生産方法を有機JAS認証時に認めてもらうことなど、各方面から意見を聞き、参考にしていきたいと締めくくった。

◇講演3「有機JAS認証機関から見たGAP認証と有機JAS認証」

特定非営利活動法人日本オーガニック&ナチュラルフーズ協会
理事長 高橋勉氏

有機JAS認証とGLOBALGAPの認証機関
認証とは明示された「手順と基準」であり、手順に基づいて基準への適合性を審査するものである。利害関係の有無に関わらず認証は行われるが、いずれの場合も審査に必要な手順が明示されていない限り認証とは呼べないと説明した。認証はあくまで道具であるため、自身の経営規模や販売方法で使い分けていくべきとした。大手流通や貿易などは有機JAS認証のような第三者認証を取得し、会員取引などでは第2者認証（有機の表示には制限あり）を、そして顔が見える身近な取引では生産者の自己宣言で対応し、それぞれの立場で使い分けていけば良いとの考えを示した。

◇講演4「SDGsと有機農業—持続可能性を目指す認証システム」
一般社団法人日本サステナブル・ラベル協会

代表理事 山口真奈美氏

2030年にあるべき社会を達成するため、バックキャストिंगの考え方で2015年に採択したSDGs17のGOAL
食品安全だけでなく労働の在り方なども含んだ様々な認証ラベルについて解説するとともに、認証は取得が目的ではなく、取引先や取引国のルールに対して裏付けを担保する過程であると説明した。行政も意欲的に推進しているエシカル消費についても海外の事例を取り入れながら解説した。



第二部（パネルディスカッション）

徳江理事がファシリテーターを務め、講師4名がパネラーとなり、「GAPと有機JASの差分認証と新たな認証基準の必要性」をテーマにパネルディスカッションを実施しました。参加者からの質疑応答に
応える形式で議論を深めていきました。下記、意見の一部を報告いたします。

- 有機と健康との関連性について
 - ・有機と健康に関する事例研究が行われている段階
 - ・日本人は人と環境との結びつきに対する意識が欠如している
- 有機JAS認証-製品認証/GAP認証-システム認証
 - ・海外では行政の後押しがあり、有機製品がより生活に密着し、販売側の工夫もみられる
 - ・認証はメーカーの生産姿勢を伝える道具である
 - ・国は農業者にGAPに取組んで欲しい思いがある（経営戦略上の理由で実施しない農家があることは承知している）
 - ・GAPとJASには、差分で埋まりきれない項目が多数ある
 - ・GAP取得には時間や書類整備に膨大な労力が必要
一農家には負担が大きい。人材の力量も必要
 - ・GAPは日本や欧米のチャイナリスクの回避
 - ・認証機関としては有機農家が今後トレードから乗り遅れないよう対応していきたい
 - ・オーガニック全体の意識を変化させるために、消費者にしっかりと伝わる表示をつくる必要がある
 - ・GAP認証のレベルが毎年上がっていく
 - ・有機JASという土台があるため認証システムは自分達で作れるので、議論が進むことを望む
 - ・認証機関と議論できる場を作らなければ始まらない
- 有機(有機認証)が広がらない要因と進むべき方向性
 - ・曖昧な表現が多いため人の心に届かない、響かない
 - ・有機JAS自体が消費者の期待(商品のゼロリスク確認)と異なっている
 - ・日本は元来食品の安全性が高いため、消費者意識は有機の根本(環境の持続性への配慮)に及んでいない
 - ・米国ではHealth&Deliciousのみで普及、日本人に伝わる共通項を見つけること(例、欧米ゲルソリー)
 - ・消費者に刺さるものを付加していくことが大切。考える場や議論する場があると良い
 - ・認証は疑う事から始まるので日本には合わないのでは
 - ・消費者にとってプラスになることを曖昧にせず堂々と伝えるべき
 - ・有機農業界としてハドルグしやすい環境を作っていくことが業界全体の広がりにつながる
 - ・消費者は有機JASを見たことあるがそれがオーガニックであるとの認識はない、また、有機JASが法律だとは知らない
 - ・認証の乱立は消費者の混乱と農家の負担を招く
 - ・体は食べたものでできている事や、農薬で農家が病気になるといった現実をストレートに示すことが大切
 - ・店頭表示に壁がある
 - ・初タイプキャンペーンは現代には合わない(若者はポジティブな情報に反応する傾向がある)
 - ・有機の遺伝子組み換えを排除する姿勢は消費者に理解されやすいのでは
 - ・メディアを有効活用する



理事長より

来年のオリパラ調達を控え、それに向けて取組んでいる農家の苦労や、これまで蓄積してきたものを形にし、有機農業界を広げることを目的に今後も協会活動を行っていきたくと思っています。今後の有機農業界拡大のための可能性については勉強会などを様々な活動を通し、皆で議論を深めていきたいと考えています。



【報告に関する問い合わせ】

一般社団法人日本有機農産物協会 広報担当 菜花
TEL : 03-6863-3337 E-mail : info@j-organic.jp
URL : <http://j-organic.jp/>